

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2021

課題番号：15K21034

研究課題名(和文) 秘密を通した幼児期の自他理解の発達の検討

研究課題名(英文) Developmental investigation on young children's understanding of self and others through secret keeping

研究代表者

塚越 奈美 (Tsukakoshi, Nami)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：60523701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、私と他者との距離の問題に係る秘密に焦点を当て、幼児が秘密をどのようなものであると理解しているのかを、日常のコミュニケーションに焦点を当てることによって検討してきた。研究を通し、幼児期は秘密とは情報を隠蔽することであるという理解を獲得していくが、その使用は他者を遠ざける目的ではなく、他者と親しくなるための手段として用いられることが多いことが示された。また、親しい他者との関係性においては、その距離を確認するための行動を様々な形でおこないながら、徐々に周囲との関係を上げていく様子が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通し、幼児期は秘密とは情報を隠蔽することであるという基本的な理解を獲得する年齢ではあるが、その使用は主に他者と親しくなるための手段として用いられていることが明らかになった。子どもが他者とどのように関係性を築いているのかを、私と他者との距離の問題に係る秘密に焦点を当てて検討することにより、数少ない幼児期の秘密に関する研究に新たな知見を提供できたものと考えられる。また、日常のコミュニケーションを中心に研究したことにより、保育や養育において大人が子どもの言動を理解するための一助にもなったものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The research purpose was to make clear how young children understand secret keeping by focusing on their everyday communication, especially on psychological distance between themselves and their mates. Young children begin to understand that keeping secrets is covering up some information, while it was shown that they use secret keeping not only for distancing others but also for getting close to them through this survey. In addition, it was observed that young children gradually expand relationship with their close mates around with checking the psychological distance.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 秘密 関係性 コミュニケーション

### 1 . 研究開始当初の背景

保育施設に赴くと、幼児が耳元に顔を近づけて「私の好きなもの教えてあげるね。みんなには秘密だよ」とささやいてきたり、「これあげるね。他の人に見せちゃだめだよ」と工作や手紙をそっと手渡してくれたりする。また、「この作戦は、〇〇組だけの秘密にしよう」と言って、楽しそうな表情でこっそり活動する姿や、情報を共有してもらえなかった寂しさから涙したり抗議したりする姿などもみられる。

亀山(1990)によれば、「秘密とは、積極的な、あるいは消極的な手段によって、特定の情報を隠ぺいすること」である。上述した秘密にかかわる幼児の姿からは、情報を共有する者どうしの距離を近づける一方で、情報を共有しない者どうしの距離を遠ざける。また、こうした接近および離反は同時に起こることもあることから、秘密は二者の間のみに関じた関係性をもたらすものではない。すなわち、秘密を共有した誰かと距離を縮めることは、秘密を非共有した別の誰かとは距離を取ることであり、そこで生じる関係性はダイナミックなものといえる。また、情報の非共有によってあえて距離をとることが、のちの情報の共有の価値を高める場合もある。

養育者との関係性が密接な乳児期とは異なり、幼児期の子どもは一人の独立した存在として、他者とは違うかけがえのない「私」を確立していく。この自己の確立は、発達とともに徐々に他者と距離が生じていくという単純なものではなく、強く他者の存在を感じ、心的に重なり合う経験によって、一層自己と他者との違いを理解していくというような複雑なプロセスを経て成立するものである。言い換えれば、自己の確立は多様で複雑な自他関係の中で培われると考えられる。先に述べた秘密にかかわる関係性も、複雑で多様な自他の関係性を反映するものの一つであるとすれば、これに着目することで、幼児期の自他関係の本質や自己確立に至るまでの発達過程の一端を明らかにできると考えた。これがこの研究の契機・背景である。

### 2 . 研究の目的

上述したように 秘密を持つことは 秘密の情報を共有する相手との距離を近づけると同時に、その情報を共有しない相手との距離を拡げるといった役割を果たす。このように、秘密は「私」と「他者」との距離(心理的な距離、場合によっては物理的距離も想定できる)の問題を含んでいる。したがって、ここには、日常のコミュニケーションの中で醸成されてきた自他の関係性が反映されているはずである。しかし、臨床的な報告を除けば、幼児期の秘密に関する研究は、管見の限りその数は極めて少ない。また、子どもがどのように秘密を理解し、日常において他者との関係性の中で秘密とかがわっているかに関しては、まだ十分に明らかにされていない。

そこで、本研究では、幼児期の子どもは秘密をどのようなものであると理解し、秘密を通して他者との関係をどのように切り結んでいるのかを調べることで、幼児期の子どもの自他関係の様相を明らかにすることを目的とした。具体的には次の2つを目的とした。 幼児が秘密という行為を何歳頃から理解するのか。 実際にどのような情報を秘密とし・その秘密を共有する他者は誰であるのか。これら2点について観察等を通して検討することによって、幼児の自他理解の発達がどのような様相をたどるのかに関する新しい知見を提示することとした。

### 3 . 研究の方法

本研究は、幼児が秘密という行為を何歳頃から理解するのか、および、実際にどのような情報を秘密とし・その秘密を共有する他者は誰であるのか、という点を検討することを通し、秘密という文脈から幼児の自他理解の発達に関する新しい知見を提示することを目的とした。そこで、次のような方法で研究を実施した。

#### 文献検討：

秘密や嘘等、自分の気持ちや情報を隠す場面に関する文献講読を通し、情報の共有と非共有が他者との関係においてどのように作用するのかについての理解を深めるために、『子どもの嘘と秘密』『秘密の心理』の2冊を選定し、学部生および院生と読み合わせを通して理解を深めた。その後、さらに秘密や嘘を扱った文献を集め、秘密の役割・機能に関する整理や大人と子どもとでみられる秘密の扱いの違いなどに関する整理をおこなった。

#### エピソード収集：

幼児が秘密という行為を何歳頃から理解するのか、および、実際にどのような情報を秘密とし・その秘密を共有する他者は誰であるのか、という点を検討するために、幼児の観察を通じたエピソード収集、および、養育者や保育者からの情報提供によるエピソード収集をおこなった。観察では、幼児がどのような時間帯、場面、方法で秘密に関する行為をおこなっているのかに注目し、その発言や行動をノートに記録し、これらをもとにPCでフィールドノーツを作成した。養育者や保育者を対象としたエピソード収集は、質問紙およびインタビューによって情報提供を得た。養育者や保育者を対象にしたエピソード収集を実施したのは、観察時にはみられない子ども同士のエピソードや、対保育者や家庭間で繰り広げられるエピソードも収集したいと考えたためである。

他者との関係性に焦点を当てた検討：

幼児期の子どもは一人の独立した存在として、他者とは違うかけがえのない「私」を確立していく時期だが、これは発達とともに徐々に他者との距離が生じていくという単純なものではなく、強く他者の存在を感じ、心的に重なり合う経験によって、一層自己と他者との違いを理解していくというような複雑なプロセスを経て成立するものであると考えられる。そこで、幼児期における他者との関係性の変化を検討するために、母親による養育記録を手がかりとした分析をおこなった。一人の子どもの幼児期前期から幼児後期にかけての記録を分析し、愛着対象との関係がどのように築かれてきたのか、また、その関係性が保育施設入所などの環境的变化を子どもが意味づける際にどのように寄与しているのかを検討した。

#### 4．研究成果

文献検討：

文献検討では、情報の共有と非共有が他者との関係の中でどのように作用するのかについての整理し、やにおける計画の立案や考察に役立てた。秘密と同様に情報を隠す目的で使用されるものに嘘があり、嘘は特定の情報を隠すために、それに代替するフィクションを積極的に創造するのに対し、秘密はフィクションの有無にかかわらず情報を隠蔽するという点に主眼があるとされる（亀山，1990）が、その区別は厳密ではなく、日常生活において区別することは難しい。一般的に嘘はよくないものと考えられているが、嘘は自分の身を守り、現実とは異なるものと理解した上でフィクションを扱う能力は発達のにも重要なものであり、本研究においては嘘と秘密を厳密に区別するのではなく、観点を広くしてのエピソード収集等を実施することとした。

また、第三者の存在が子どもの人称の分離に影響を与えているように、二者間の秘密だけではなく、三者以上の複数人が関係するエピソードも収集することで、子どもの自己や他者への認識の変化が検討できると考えられた。これに加え、秘密には世代間の境界をつくる役割もあることもあり、親のまなざしと自分のまなざしのずれを理解し、秘密を貫くことが大人になることでもあるとされる（小此木，1986）。そのため、保育者や保護者という大人との関係性の変化という点にも注目したいと考えた。以上のような点を、以下のやの計画や考察に役立てた。

エピソード収集：

幼児を対象とした観察研究では、「文献研究」の秘密の役割（小此木，1986）に基づき、収集したエピソードを、「秘密を共有したか」「共有しなかったか」の2分類することを試みようとしたが、この視点から明確に分類することはできなかった。これは、観察者である大人を相手に生じたエピソードが多かったことが影響している可能性がある。観察者は実験や観察のために時々園を訪れる存在であって、常に子どもと一緒に生活している存在ではない。その分、在園時には話をしたり遊んだりしたい気持ちが子どもには強かったため、親しくなる目的で秘密を用いることが多くなることが影響していたと考えられる。

また、幼児は他者と親しくなるための手段として秘密を用いることが多いことが明らかになった。情報を隠蔽する場合も、他者を遠ざける目的ではなく、情報の共有に至るまでの過程を楽しみ、最終的には他者と近づき親しい関係であることを感じる目的で用いられていた。岡本・菅野・塚田・城（2004）は、4歳頃の子どもたちは、秘密にする行為そのものが楽しいため、あることを知っているのは自分たちだけで、他の人には教えないことを約束したりする本当の意味での秘密を理解するのはもう少し先のことでありと述べている。本研究で得られた結果も、この様子と共通する点があると考えられる。

次に、保護者や保育者による情報提供によるエピソード収集からは、いつも遊ぶ同年齢の仲間とのいざこざにおいては、相手を遠ざけるための秘密も用いることが報告されており、秘密を通じた多様なつながり方が存在していた。総じて、秘密は気持ちや情報を他者に隠すことであるという理解は、幼児期には獲得されているが、その一方で、大人と同じように秘密の効用を理解して用いているかという点と必ずしもそうとはいえないことが明らかとなった。

他者との関係性に焦点を当てた検討：

子どもは2歳半から3歳頃になると、自分と養育者が違う存在であることを理解した上で、養育者を心の中に描くようになるといわれている。このため、この時期の子どもが養育者とどのような関係性を築いているのかを検討した。

幼児は愛着対象と自己との関係性を反復的に確認しながら、愛着対象の価値観や対他的態度を取り込みながら、家庭外の事象にも興味・関心を寄せ、保育施設などの新しい環境世界を徐々に受容していく様子がみられた。その過程においては、象徴機能に基づくファンタジーとともに、愛着対象とそれ以外の他者との距離を様々な形で確認する手段の1つとして、情報の共有と非共有がおこなわれていた。

#### 5．反省と今後の課題

相手の気持ちや状況を考慮することなく、自分の思いだけを一方的に伝えることや必要のない情報を伝えることは、時に相手との関係性を壊してしまう。秘密は特定の情報に対する相手の

認知が重要である。こういったことを子どもは何歳頃から意識するようになるのかについては、エピソード収集や養育記録の検討からは十分に明らかにすることはできなかった。そこで、最終年度には、幼児を対象とした実験研究を実施した。この結果は現在分析中である。研究期間は終了したが、今後も引き続き秘密を通した幼児の自他理解の発達について検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 塚越奈美	4. 巻 27
2. 論文標題 子どもの日常生活に見られる移行対象・空想対象に関する研究：幼稚園児の保護者および児童養護施設職員への質問紙調査からの検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育実践学研究（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 紀要）	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塚越奈美、秋山麻実、志村結美、川島亜紀子、小島千か、渡邊文代、佐藤和裕	4. 巻 25
2. 論文標題 利用者が感じる山梨大学附属図書館子ども図書室の魅力：附属幼稚園児の保護者を対象とした質問紙調査からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育実践学研究（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター 研究紀要）	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成田雅博，秋山麻実，田中武夫，高橋英児，塚越奈美，鳥海順子，新野貴則，服部一秀，古家貴雄，吉井勲人，古屋義博	4. 巻 24
2. 論文標題 山梨大学教育学部における教員育成に係る少人数グループワーク型基幹授業群の効果に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 25 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塚越奈美、山名裕子	4. 巻 17
2. 論文標題 生活科における子どものつづやきに対する大学生・保育者・小学校教諭の読み取りの比較：「アサガオって字読めるのかあ？」の背景に何を読み取るか？	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 山梨大学教育人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塚越奈美、和氣詩月
2. 発表標題 絵本と紙芝居の構造の違いが聞き手の印象に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塚越奈美、多田幸子
2. 発表標題 幼児期前期における愛着関係の広がりと他者性の育ち：養育記録に見られる生活と遊びの両場面に広がる子どものファンタジーはどう意味づけられるか
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塚越奈美
2. 発表標題 幼児は秘密を他者とどのように共有するか：幼稚園児を対象とした観察研究
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荻原ひろみ、古屋あゆみ、野田多佳子、秋山麻実、塚越奈美、大野歩
2. 発表標題 記録の間に立ち上げる育ちの物語
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚越奈美
2. 発表標題 空想世界を楽しむ幼児の行動観察：探索的事例検討
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 太田 信夫、小畑文也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 152
3. 書名 福祉心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------